

2024年10月

## 課題本 『ケーキの切れない非行少年たち』

宮口幸治/著

新潮社

2019年

### ◆◆◆10月の読書会から

先月の感想文を読んで振り返りました。『広島へのさまざまな旅』が収められている『ヒロシマ・ノート』を読んだ人もいました。著者が書いている「戦争の悲惨」とは何か、「広島」と「ヒロシマ」の表現の違いが表すこと、広島、長崎の原爆以降の被爆など、ひと月の間に考えたこと、感じたこと、知ったことなどを交えて新たな広がりが見えました。

今月の課題本は『ケーキの切れない非行少年たち』、児童精神科医である著者が出会った非行少年たちを通して気づいた認知力の弱さに焦点をあてた本です。出版当時とても話題になりました。  
(文責:森下)

### 2024年竹原読書会 10月『ケーキの切れない非行少年たち』宮口幸治

吉川五百枝

かなり売れている本だと聞いていますが、それにしても味気ない題だなと思いつつ手にしました。

しかし、児童精神科医であり、精神科病院や医療少年院に勤務、臨床心理士でもあり、現在は臨床心理系大学で講義をしているという筆者の肩書きを見ると、単刀直入の題になったのも頷けます。ただし、ここでの「ケーキの切れない」のは「等分にケーキが切れない」ということでした。

「等分に」というのは、数的処理を目的にしているの、全体的に、可視できる部分(例えば検査の集計や対面指導記録)を、判断材料として論じている本だと私の視点を整理しました。子の性別を抜きにして、「少年」と表現するのも筆者の立ち位置なので、読む私も踏襲します。

ケーキを等分に切ることに価値があるのか、とか、切り方のアートの問題とか、切る場の雰囲気はどう読むか、とかは、また別の筋立てが必要です。

「非行少年たち」と言うのも、「家裁を経由して何らかの審判に由ってそれぞれの施設に関係する少年たちなど、これまでの勤務経験の中で出会った少年たち」という把握しやすい括りの中の少年たちの事だと思います。

少年という全存在を語る事になれば、とてもこの本のページ数では書き切れなんでしょうし、そもそも一般論にしてしまえば、筆者が言いたかった“支援から取り残される少年達”への眼差しがぼんやりするという危惧があったでしょう。

今回、例会当番の方から「発達障害と少年非行は関係している」という短絡的な誤った認識が普及している」という塩川宏郷氏の資料提示をいただきました。これは気を付ける必

要がある指摘だと思います。

塩川氏の文章では、近年、発達障害と非行少年を〈ダイレクトに結びつける短絡的認識〉で話題にされることもあるが、「非行少年」「発達障害」この二つの語彙をイコールに繋ぐと、問題が変わってしまい、誤った結論になるという指摘だと思います。筆者も塩川氏も、少年非行と発達障害が関係している割合が多いか少ないかを問題にしているわけではなく、ましてや、筆者の主題は、非行少年と言われる少年達の特性を取り上げることによって、これらの少年、ひいては、一般的少年支援をどうすれば良いかを考えるための執筆だと思います。

つまり、〈生きにくい〉と言え、大人も子供も、殆どの人がその状況をかかえているだろうから、そのうちの把握しやすい(勤務上出会う)少年を観察する時、SOSが見落とされたり、適切な支援に恵まれなかった子たちが見えて、それに対して、社会が何をしてきたか、何が出来るかを問い直そうとしている“処方箋付きの観察ノート”だと思います。支援の必要な少年達が居る、と声を大きくして書かれたものだと読みました。

数字やトレーニングの記述が多いので、少年達への寄り添いが少ないと感じられますが、観察ノートのようなものだからでしょう、少年達への支援が「学習面」と「身体面」と「社会面」という3つの区分けになって記述されます。

これらについての観察は頷くことが多く、頁を順に読みながら、“処方箋”とも言える最終章第7章を早く読みたいと問題提示の度に誘われました。

第6章まで、認知行動療法や思考の歪みを察知する神経心理学検査などによって、早期の発見と支援の必要性が述べられます。少年達が、反省する以前の段階で、認知機能(見る 聞くなどの基本的機能)の弱さが指摘されています。

この点は、本から目を離して、赤ちゃんの「スマホデビュー」の問題として身近に受けとめました。基本的な認知力が育つ以前に、「スマホデビュー」をする赤ちゃんたちの事を考えてしまうのです。語りかける周りの大人達の声を「聞く」前に、常時、機械音(自分の為の音ではない)を聞き、一定の枠や色彩を「見る」スマホ画面にさらされる赤ちゃんの実態を思い出すと、非行少年の問題ではなく、“子育て社会”の基礎力を問うことだと思いました。

この本では、学習面について、より適切な勉強への指導を求めています。最近、「通級指導」という教育がとりあげられているようです。

学校で、「困った子」と言われる子供に、その子の発達特性を理解して通常学級とは別にグループや1対1指導を行う授業時間を持つ方法です。〈少年院に行くことは、教育の敗北〉とまで筆者に言われた学校の中で、沢山の問題をかかえながらも、学校教育法に基づく特別支援教育の研究があちこちで見られるようになりました。子供達からのSOS発信をいかに受け止めるか、学校がどうやって応えるか、この課題についての“処方箋”の一つとして、筆者の「コグトレ」(認知機能強化トレーニング)などが方法論として寄与しているのではないかと思います。

〈社会性こそが教育の最終目標の一つ〉という筆者ですから、対人関係性の修復を主眼にしていると思いますが、特に、〈学校教育の中で、支援が系統立てて成されていない〉という指摘が読み取れます。学校制度の構築の仕方、教職者の人間的経験、世間の価値観など、大きな問題を感じます。

この本は、“観察ノート”のような内容を、「コグトレ」の紹介で閉じていますが、ヒトは、ソー

シャルスキルトレーニングでどこまでトレーニングできるのかなと思います。自己洞察、葛藤、自己内省、自己規範の作り方、それらは、社会(他者)と自分との関係性の問題で、誰でも、いつでも抱え込む事柄です。

今日は、事件を起こしていないけれど、明日、眼前で縁者が酷い目に遭ったらやり返すかもしれない。そういう危うさの上にいる自分を思いながら、この本を読みました。

認知機能や感情抑制のトレーニングで掬い取れない生きるということの危うさは、どうすれば良いのでしょうか。しかし、それは、また別の本で。

## 『ケーキの切れない非行少年たち』を読んで

### ◆【KT】

ケーキが切れないとはどういうことかが冒頭に出てきます。知能的な程度の低さが目立っているということです

犯罪を犯した未成年が鑑別所に行くとか、精神鑑定をされるとかよく言いますがこの事なんだなとわかりました。それには時間がかかるのもうなずけます。

老人とかの認知症よりもひどい程度かも？とってしまう研究結果でした。

幼い頃に愛情を受け家族とコミュニケーションをとってもらっていなかったなら感情とか思考力が育たず興味や欲求しか先行するようになる。

発達障害は脳の病気のためにまた思考力のバランスが普通の人より片寄っている。

普通の人こんなことは私もあると感じることは少しあります。

幼児教育、学校ではどうしても勉強に重きをおき、道徳は少しだけになっている。心の教育は家庭中心だと思っても家庭で共に過ごす時間、共に食事する時間も難しくなってしまう。働く事が生活の中心になっている世の中になってしまっている。

最近、フランスの生活についてある本を読むとフランスは仕事よりも家庭が第一だそうです。そして自分意見をはっきり言って議論することも大切な国だそうです。

読書をしてよく考えて人と意見を言ってコミュニケーションをとれることは感謝です。

この本は専門家の統計的な事が書いてあるので、一人一人違うケースは多々あると思います。専門家には本当はこんなケースがあったとかこんな人もいるとか数をあげたらきりが無いと知っていることでしょう。

人の話をよくきいて向き合うことは私も課題にしていきたいと思います。

### ◆【T】

『子どもの心に扉があるとすれば、その取手は内側にしかついていない。』子どもの心の扉を開くには、子ども自身がハッとする気づきの体験が最も大切であり、我々大人の役割は、説教や叱責などによって無理やり扉を開けさせる事ではなく、子ども自身に出来るだけ多くの気づきの場を提供することなのです。」と作者が言っているがその通りだと思う。無理

やり扉を開けさせると、やりたくはなかったのにとか自分の本意ではなかったと考えたり、正しく理解することが難しかったりして再び扉を閉めてしまうこともある。

今までは、子どもは遊びの中で学ぶことが多いから、しっかり遊ばせたらよいのではないか、その中でいろいろな経験を積み重ねることで語彙力も増え、しっかり聞いたり見たりできるようになったり、友達との関わり合いの中で、様々な感情を学んでいくのではないかと考えていた。また、家庭の中や子ども同士のコミュニケーションの中で聞いたり見たりしたときに気づくことが多いのではないか。本やテレビなど読んだり見たりしたときにも気づきはあるのではないかと思っていた。

しかし、見たり聞いたり想像したりする認知機能が十分でないときは子ども自身で気づくことは難しい。それが難しい子どもたちには、社会面・学習面・身体面での支援は大切である。

先日、NHKのドラマ「宙わたる教室」を見た。読み書きが苦手なために中学から不登校になり、20歳になって夜間定時制高校に通い始めたが、1年経っても字が頭に入っていない。主人公の先生から、学習障害(発達性ディスレクシア)ということを知ってもらい、「自分は、怠けていたわけでも、努力が足りなかったわけでもなかったんだ。」と小学校中学校時代を振り返る場面があった。周りの理解・支援があればこれほど苦しまなくてもよかつたらうにとドラマを見て考えさせられた。

最後の部分、「犯罪者を納税者に」のところで、多くの金銭的な損失について言及されているが、かかる費用を減らすために支援をするのではなく、一人一人の生きづらさを解消し豊かに生きられるようにするために支援をし、その結果かかる費用が減っていくと考えた方が良いと思う。

## ◆【 KH 】

今回は、読書会に参加できなかったので、当日の議論を聞いていない、いつもに増して拙い感想文をお許してください。

私が、これあるある！！その通りよと思ったのは、『子供のいいところを見つけあげる、褒めてあげる』つまり“褒めるの嵐”にげんなりするという、筆者の言葉。深く共感。

●通常社会で褒められるほどのことでもないようなことでも褒めてしまう

●とにかく話を聞いてあげる

→そんな事で問題は解決しない。いずれも根本的解決にならない。

なぜならできない事実は変わらないから

その通りだなあ。。本書の後半に紹介されていたコグトレなるもの(認知機能教科トレーニング)は確かに効果的かもしれない。根性論や、ひたすらトレーニング(計算、漢字)ではなく、認知機能を見直すというのは、とても効果的なのではと、思った。

さらに自尊感情に関する記述。この本を読む直前まで、私も、自尊感情は高い方が良いと信じていた。しかしだ、『自尊感情が低くてもちゃんと社会人としてなんとか生活している人は、大勢いるのではないか。問題なのは、自尊感情が実情と乖離している事である、等身大の自分をわかっていないことが問題だ』と、作者は述べている。

等身大の自分をわかっているかと問われれば、途端に怪しい気持ちになる。大いなる勘違いをしながら、60余年生きてきた気もするから。問題はしかしそこではなく、この本は、問題を引き起こした青少年をいかに矯正してよりよく生きて行く道に導くか、自己に注意を向けさせることが大切(そのために鏡で自分の姿を見せるという)。等身大の自分を認めて、次は、正しい規範を作り、その理想に近づくべく頑張ろうと思ってもらおう。そんなに絵に描いたように、人は進まないだろうなあと思うけれど、諦めない、不断の努力が求められるのは、青少年ではなく、周りの大人たちの方だろう。

P153『子どもの心に扉があるとすれば、その取手は内側にしかついていない』  
扉をあけて、話をさせて。。そう懇願する切ない気持ちが、目の前の子どもの心に響いたとき、扉は外へと開くのだろう。

## ◆【望月悦子】

今回の課題本の表題に疑問をもった。ケーキの切れないのは非行少年だけであろうか？ 高齢者は？ 不器用な人たちは？ そもそもどのようにケーキを切るのを良しと評価しようとしているのか、その測定基準は？ 等々怒りが募る。自分は何に怒っているのか。「非行少年」とはこうあるのだとひとまとめに実態をまとめようとしていることに？「非行少年」も現象面だけでは語ることでできない「人間」の一人であり、ひとまとめに評価できない複雑な不思議な人間であることが語られていないことに怒りを覚えるのだろうか。発達障害の特性と少年の非行を短絡的に結びつけようとする認識度に？ 考えれば考えるほどに怒りや悲しさが増長してくる。メンバーたちから本が売れるための題名だろうという発言に納得しようとしている。

著者は、「子どものこころの専門医」「日本精神神経学会精神神経科専門医」「医学博士」「臨床心理士」の肩書の所持者であるが、自分はこういう分野は浅学なので正しく理解できないのかもしれない。しかし自分なりに考えたことを2点まとめてみたいと思った。

その1、ここでは、医療少年院は特に手のかかる発達障害・知的障害をもった非行少年が収容される「少年院版特別支援学校」といった位置づけになっているようだ。子どもが少年院に行くということはある意味「教育の敗北」でもある(P27)と記述。そうだろうか？ 日本国憲法第26条に教育を受ける権利と受けさせる義務があると明記されているが、教育の敗北は、何も少年院の子どもたちだけに考えられることであろうか。いじめや不登校など教育現場で生きづらい子どもたちは年々増えている。そんな中で「非行少年」は発達障害者で知的障害者であるというレッテルを貼ることに・貼られることに反発を覚える。非行少年を含めた生きづらい子どもたちに対して「教育の敗北」であることは、教育現場に携わっている人間は大いに反省するべきではあると思う。とりわけ今流行りの教育用語(発達障害・知的障害・ASD＝自閉スペクトラム症・ADHD＝注意欠陥・多動症など)に振り回され、よく理解もしないで子どもを分類し、努力もしないで専門家に委ねる。専門家も子どもの一部だけを観察しレッテルを貼ることに何ら抵抗感もなく決めつけていく。専門知識のない親は専門家が言うのだからと不承知ながらも従わざるをえないと思いつまされていく実態。教育現場はこれでいいのかと怒りが増幅する。そもそも非行に走らざる得ない子どもたちの要因は？ 一人一人の子ども

たちが大人の判断や基準で分類されずに大切にかかわってもらえ、真摯に向き合ってもらっているのだろうか。

その2、少年院版特別支援学校では、治療法として、自分のことを正しく知ることが更生へのスタートとしている。その中で5点非行少年に共通する特質をあげている。①認知機能の弱さ(見たり聞いたり想像する力が弱い) ②感情統制の弱さ(感情をコントロールするのが苦手、すぐに切れる) ③融通の利かなさ(何でも思い付きでやってしまう。予想外のことに弱い) ④不適切な自己評価(自分の問題点が分からない。自信がありすぎる・無さすぎる) ⑤対人スキルの乏しさ・人とのコミュニケーションが苦手・身体的不器用さ(力加減ができない、身体の使い方が不器用)などがまとめられている。しかし、これらの症状は非行少年に限らず多かれ少なかれどの子ども抱えている実態である。認知能力を育てるためにコグトレ(Cog-Tr)が考案され、3つのトレーニング方法を考えている。その3つとは社会面(対人スキルの向上)学習面(基礎学力の土台作り)身体面(不器用さの改善)で構成されている。そこには確かに子どもの心・情緒(様々な感情が、内からこみあげている状態を言い怒りや苦しみ、恐怖などの喜怒哀楽の感情)をベースにトレーニングされているように見えるが、数値化されにくい心や情緒をどう評価していこうとしているのか。数値化された3つの分野が達成されると更生できたとするのか。それともトレーニングが終了すると更生されたと評価が下るのだろうか。子どもたちが育ってきた養育歴・成育歴の中でどれほど基本的な信頼関係や愛着関係が育てられてきたのだろうか。非行少年一人一人の養育歴を丁寧に把握してトレーニングが開始されているのだろうか。数値では評価しにくい領域の扱いが見えてこない。「子どものこころの専門医」である著者は数値では表わすことのできない「こころ」の領域をどう考えているのだろうか。とかく研究者は可視化されないデータは、科学的でないと軽視される傾向がみられる。「人」が「人」になるためにトレーニングで成長する・更生する考え方そのものが短絡的であるとしか言いようがない。専門家として医療少年院などで勤務することは並大抵では推し量ることができない苦勞が多いと推察できるが、狭義的に子どもを受け止めてはいないだろうか。真に子どもを教育することは難しい。これが正解であるとは言えない分野であるから。成人した大人である人間が非行少年を含む教育を受けさせる義務のある人間を育てるためには、上からの目線ではなく一緒にお互いが育ちあわなければならない関係にあると思う。

コグトレ研究会は3方面から、困っている子どもたちの支援を考えていく教育・医療・心理・福祉の専門家からなる研究会で、研修会を通して『子どもたちへの新しい援助方法』を提供しているとのことであるが、更生してやろうとか、更生するためにはこれが正しい方法であると狭義的にのめり込んでしまうことのないように願わずにはおれない。

## ◆【 MM 】

今月の課題本を読んで驚いたのは、反省を促すように言われても、そもそも悪いことをしたということを理解していない少年、少女がいるということだ。見たり聞いたり想像する力が弱い。こちらが見えていることと彼らから見えているものが違う。どれくらい違うのかというと表紙

にあったような「ケーキの切れない」、いびつな切り方をするあの図になる…。自分が考える常識をはるかに超えてきた。「そりゃ反省って言われてもわからないか…」と愕然としたが、だからと言って放っておけない。

少年たちが罪を犯すまでどんな道のりをたどってきたか。勉強についていけず落ちこぼれて否定され続けたり、つまづきのサインを気づかれずに放置され続けたのではないか。虐待やネグレクト、いじめなど環境に苦しめられた人もいたかもしれない。周りに諦められ、自分でも自分に期待できない、自分を信じられない。そこからの矯正…なにから手を付けていいのか、途方に暮れる。反省という言葉が本人から引き出すだけではだめだ。それは大人が期待していることであり少年たちはそもそもの反省、何をしたから反省する状況にあるのかを理解していないかもしれない。反省という言葉がでてきたからよし、では社会に戻ってもまた犯罪を繰り返してしまうだろう。

著者は知的障害、知的なハンディをもって日々困っている人に注目し、認知機能向上のトレーニングを紹介した。見る力、聞く力、想像する力を鍛える。また、感情をコントロールすること、自分に向き合うこと、人とのコミュニケーションの重要性についても触れていた。

課題本を読んで私が感じたのは、読む力、考える力、想像力や自分をコントロールする力を身につけるには、読書は有効なのではないか、ということだ。物語を読んでその世界に入りこむこと、物語以外の科学や実用的な本を読んで知識を深めること。本の中ではいろいろなことが起こる。いろいろな人が出てくる。知らないことを知ることができる。漢字が読めなければ絵本や読めるものから手に取る、見ることから始める、でもいいかも…。押し付けるのではなく周りにいる人が読書を楽しんでいる環境があればさらにいいかもしれない。学校で読み語りボランティアをしているので、読書の楽しみを少しでも感じてもらえたらいいなあと思う。今月の課題本は遠いところで起こっている問題ではなく、私にも何かできることがあるかも、できることをしていきたい、と思わせる本だった。